

第百廿六 申出

大原は平生の様子に似ず胸中に幾分の苦みを忍ぶ如く幾度か口籠りて徐ろに「中川君、僕も此頃は色々今度の事情を考へて居るが、何うしても急には叔父や叔母が僕の言ふ事を承知して呉れそうも無い、それに第一當人のお代先生が挺でも動かんから子」中川「アハ、爾うだらう、お察し申す」大原「ところで一同が大阪から戻つて來ると再び結婚問題が起る、其時僕が強情張つて結婚の事を承知せんとしても叔父や叔母が直ぐにお代先生を郷里へ連れて歸る氣支は無い、親達が歸れと云つても御本人が歸らうと云はん、爾うすると中々急に此の問題は片付かんよ、假令ひ無理やりにお代さんの方を片付けても其の跡へ直ぐお登和さんの事を持ち出したら叔父や叔母が必らず故障を言ふだらう、爾うすると此事も容易に纏まらん、僕は纏まらんでも構はんけれどもそれが為にお登和さんを何時迄も引張つて置いて曖昧模糊の中に女盛りの時期を過ごさせて了つてはお氣の毒だ、僕も情々考へて見たが畢竟お登和さんが僕に過ぎて居る、即ち僕には天から授からんものとも思ふ、僕の様な者に嫁するよりお登和さんの為めには外に大なる幸福が待つて居るかも知れない、公平に考へたら僕としてお登和さんを望むのは少々不釣合だ、僕の事が無かつたらお登和さんは何んな好い處へでもお嫁に行ける、今となつてはお登和さんの名が廣海子爵の耳へでも聞えて居る位だからお嫁に行くとなつたら何處からでも貰ひに來るだらう、お婿さんは好きなのを擇取次第だ、そのお登和さんをして僕の為めに大切な嫁期を失はしめると僕も却て心苦しいから僕の願ひと云ふのは今にも外から好い口が出て來たら僕に構はずお登和さんを何處へでも嫁に遣つて呉れ給へ、僕は決して君達を怨まんよ、僕は天より授からんと諦める、今の有様で待つて居ても僕の方は到底急に片付かん」と是れが大原のお登和嬢に對する誠の心なり、中川は默然として答へず、側に在りけるお登和嬢は少しづつ、身を退りて中川の後に隠れ、窃に鼻をすゝり暗涙を泛べて復た大原を仰ぎ見ず、大原も其心根を察して愈よ堪へ難く「モシお登和さん、僕は實に貴嬢の御親

切に感泣して居ます、貴嬢のお心の美しいのを知るに就けて愈よ貴嬢の爲めに幸福あれかしと禱つて居ます、僕の事で何時までも引張られては貴嬢の幸福でありません、僕は貴嬢が幸福な處へ御縁付になりさへすればそれを何よりの満足と致します、子一中川君、僕の言ふ處に少しも無理はあるまい、僕の心はよく御諒解になるだらう」と是程清き心は無し、去りながら中川も容易に答へず、お登和嬢は益々頭を垂れて折々は袖を顔に當てぬ、二人は如何に考へつらん、大原の心の誠なるほど猶更其言葉を納れ難し、中川は良あつて「大原君、今急に爾んな事を言出さんでも宜いではないか、モ一少し成行を觀て居るさ」と斯る相談を打消し度く思ふ、大原も決心する所あり「イヤ爾つて無い、此事を君達に承知して貰はんと僕は重荷を背負つて居る様な氣がして甚だ心苦しい、僕がお登和さんに對して罪を作ると云ふ様な場合だから子、何うか僕の心の苦痛を察して呉れ給へ」と是れも亦理り無きにあらず、

第百廿七 承諾

大原の言葉切なれども中川は急に思案を定め兼ね默然として何とも言はず、お登和嬢は兄が如何に答ふるやと窃に其様子を窺ひて折々涙を拭いて居る、兄も亦た妹の顔を覗けり、その愁然たる様子を見て其の心の悲しみ察しぬ、妹の心は大原に附着せり、大原を置いて外に復た望む所無し、我身の返答一つにて妹も嘸失望せん、大原の言葉も無理ならねど我身は迂濶に答へ難しと双方へ氣を兼ねて口を開かず、良ありてお登和嬢は席に堪えざりけん、俄に立つて次の室へ引込みたり、今の場合何をすると中川も大原も其姿を目送するに嬢は人の見ぬ處に隠れてよ、と打ち臥したる様子、兄も耐えずして眼をしばた、きぬ、大原は此の光景を觀るも憂し、生中の事を言出して飛んだ嘆きをかけ、るよと我が身まで物悲しきに堪えざれども去りとして言はで止むべき事ならず、今の内に我が心を言はざれば後の悲み今に優らんと再び胸中の苦しさを忍び「中川君、お登和さんの御親切を想ふに付け又た君の友情を察するに付けて僕は實に辛いよ、斯う云ふ事を言出すのも君達の厚意に負く様な氣がして心苦しい、と云つて其厚意を空しく背負つ

て居てお登和さんを引張つて置くのも氣が濟まん、全體僕がお登和さんを望んだのが分に過ぎて居る、天の命ずる所を待たないで無理な望みを起したのだ、僕はモー決して何の未練も無いからお登和さんのために外の良縁を捜して呉れ給へ、僕の身に取てはお登和さんから今迄の御親切を受けたのが此上も無い幸福だ」とよく／＼思ひ諦らめたり、中川は坐るに哀れを催し、「そこで君はあのお代さんと婚禮する積りかね」大原「イヤ爾んな積りは無いけれども兩親と叔父や叔母が大阪から歸つて來たら何う成行くか譯が分らん、僕が飽くまでも強情を張るために兩親の間や叔父叔母との仲へ取返へしの付かん争ひでも起つた日には僕一人の事で無い大原家一族の大事件になる、僕は斯う考へた、最初からお登和さんを知らずに居て郷里から突然お代先生を連れて來られたら何うだらうと自分で自分に聞いて見た、勿論心は進まんけれども一家一族の事情に照らして絶對的に拒む譯にもならん、是れも亦た天の命なりと諦らめて親達の心に従つたかも知らん、お登和さんの事にあつたために僕が自ら天の命に従ふ事を拒むと云ふのは僕の我儘だ、僕が自ら罪を犯したものと斷定しなければならん、譬へば僕が五十圓より上の収入が無くつて三十圓もする家賃の家へ住み度いと思ふ様なもので一旦は無理算段で其家を借りても到底長く維持する事が出來ん、それがために其家を塞げるのは僕の罪だ、爾う思つて見ると僕なんぞの分際でお登和さんの様な淑女を望んだのは今更少々滑稽に類する、誠に何うも相濟まなかつたと君達に罪を謝さなければならん、子一 中川君、人は誰でも分に過ぎた望みを起すから自分で餘計な苦勞をする、お登和さんは何うしても僕に過ぎて居る、誰の眼から觀ても僕に過ぎものだ、君に望む所は最早僕の事を念頭に置かないで、只一意専心にお登和さんの幸福を圖つて呉れ給へ」と飽くまでも我心を知らしめんとす、中川俄に聲高く「宜しい、承知した」

第百廿八 清涼劑

此の一言は對坐せる大原よりも次の間に在りけるお登和嬢を如何に驚かしけん、嬢はそつと襖から顔を出して兄の氣色を窺へり、其眼瞼の紅らみたるは袂にて幾度か擦りつらむ、大原は身に浸むる計りに感動

せしが態と素知らぬ顔して「中川君、承知したかえ」中川「ウム承知した、君の言ふ處はよく諒解した、君の精神の公明正大なる事に對して僕は少しも異議を挟む事が出来ぬ、僕は難有く君の申出を受けたよ、それで君も安心したらう」大原「ウム安心した」中川「ところで大原君、是れから先は僕等の勝手次第だからお登和を何處へ嫁に遣らうとも君は何も言はんのだ子」大原「勿論さ」中川「その代り僕の方の都合次第で急に外へ嫁に遣らなくとも君の知つた事では無い、其の事に對して彼れ是れ言ふまい子」大原「それは君の方の都合とあれば何も言ふ事は無いけれども、もしや僕に對してだと」中川「イヤそれは聞くに及ばん、君の精神はよく分かつた、君の事のある為めに何うすると云ふ譯では無いが、良縁と云ふものが三つも四つも出て來るもので無い、良縁と認めるものが無ければ二年も三年もお登和を家へ置くかも知れない、それは僕の方の都合次第さ、只其事に就いて君が餘計な心配をせん様に斷つて置くのだ、斷はらんでも君が其事迄彼是干渉する道理は無いから子」と兄の言葉は深くお登和嬢の心を得たりけん嬢は初めてニツコと笑ひぬ、大原は最早強くも争ひ兼ねたり「少し變だなあ」と頭を掻きつ、お登和嬢と中川の顔を見比べ「然しマア僕の精神さへ分つて呉れ、ば僕も幾分か氣が安くなる、今の有様では彼方へも濟まず此方へも濟まずと自分獨りで苦んで居るのだから子」中川「アハ、お氣の毒だよ、時に大原君、今日も一つお登和に料理をさせて御馳走を食べて行き給へ」大原「イヤ御厚意は難有いけれども家へ歸つてから攻撃が恐ろしい、僕が君の家へ來ると必ず下女が此の近所を護衛して居るから子、僕は所謂痛くない腸を探られる様な譯で、家へ歸つてから辯解に骨が折れる、其癖お代先生も追々とお登和さん風の料理法に感心して最早以前の様な田舎風の鹽から料理を好まなくなつたよ」中川「それは全く地勢と氣候の關係からだ、山の中に居る時と違つて海岸へ來れば身體の需要する成分が違ふし、今頃の逆上せる様な氣候に鹽からい物計り食べたら尚ほ逆上せて仕様が無い、爾う云ふ場合には酢の物を食べるが宜い子」大原「ところが妙だ、近來は握鮭だの、五目鮭だのが好きになつて毎日買食計りして居る」中川「海岸の都府に鮭屋の多いのは自然の勢ひだ、然し酸い物も過度に食べると貧血を起すぜ」大原「オヤ爾うか子、鹽からいものを食べ過ぎると何うなる」中川「蛋白質を消耗させて矢つ張り毒だ、何でも物に

は程と加減がある、殊に食物が一方の極端に走ると必ず害があるから色々な種類を取交ぜるのが一番だ、今度一つお登和に五目鮎を拵へさせて君の家へ差上げやうか」大原「何卒願ひ度い、鮎の力を以てお代先生の逆上方を引下げれば何よりの幸ひだ」と此には極度の清涼劑を要す、

第百廿九 事情世界ノ

大原は臆て去りぬ、お登和嬢今は立上るに懶くて愁然と頭を垂れ顔を襟に挟みて思案に堪えぬ風情、兄の中川も心安からず「お登和や、ちよいと此へおいで」お登和「ハイ」と立つて兄の前に来りぬ、兄も沈みたる言葉なり「お登和や、和女は大原さんの言つた事を何と聞いたえ」と優しく言はれてお登和嬢俄に復た悲しくなりハラ／＼と涙を隕して默然と差俯く、兄は態と聲高く「コレさ、爾んな事に泣くものでありません少しの事に泣くのは小兒の仕業だ、苟も覺悟のあるものが女々しく涙を漏すもので無い、判然とお答へなさい」と勵ます様に言はれてお登和嬢漸く顔を揚げ「ハイ、大原さんの被仰る處は神様でもあの上の眞心はあるまいと存じます、あれがもし外の人で、今に何うかなるから待つて居て呉れると私達に氣休めを言ふ様なら信用する事も出来ず、難有いとも思ひませんが、今の大原さんのお言葉位眞實なものはありません、心の誠はあのお言葉に現はれて居ます」と愈よ深く感激して大原の心の貴きを念ふ、兄も亦た同意なり「如何にも其通りだ、あの心が無くつては人の良人として妻に幸福を與へる事も出来ん、あれを一方から評したら想遣があると云ふのだ、日本人は何事に也想遣りが無いと言われるが汽車へ乗て他人の座席を奪つて平氣で居る處を見れば想ひ遣りと云ふ心が少しも無い、女房が家で如何に悲しんで居るのも構はず自分は酒道樂や女道樂に耽つて居るのも妻に對して想ひ遣りが無いのだ、親が子に對しても主人が奉公人に對しても何事にも今の人は想遣が無い、想ひ遣りが無ければ自分勝手の我儘計り増長する、大原君がモシ爾う云ふ人で飽までも和女を貰はうと云ふ我儘から親達やお代先生に對して何か悪い策略でも施したら今度の事を巧みに切抜ける事も出来るだらう、それをしないで何處までも誠心實意を立

て通す處があの人々の價值だ、自分のために和女が迷惑するだらうとの想ひ遣りから自分の望みを捨て、和女の幸福を禱るのは外の人に出來ない事だ、あれこそ最も進歩したる人間の情愛で、野蠻時代の人情には無い事だ、そこで和女は何と思ふ、此先の事を何うしやうと思ふ「お登和嬢頼に答へず、良ありて「兄さんは何うしろと被仰います」兄「僕も何うしろとは言へんが困る事には阿父様や阿母様の方へ一旦大原君の事を申上げて御出京を乞ひながらお代先生の事が起つたので此へ御出京になつては大變だと暫くお延ばし下さる様にと再び手紙を差上げた、此事が無くとも阿父様は博覽會見物に大阪まで御出張になるだらう、その序に東京までいらつしやるに違ひ無いが、其時大原君の事を何と申上げたら宜からう、斯う云ふ譯で事が面倒になりましたとお話申したら必ず外へ好い口を捜せと被仰るだらう、大原君の方がいつまでも片付かないでそれがために和女が二年も三年もお嫁に行かない様だと阿父様や阿母様が御心配をなさる、それも實に困つたものだ」と今は何事も事情の世中、人の一生は事情の巷に迷ふなり、

第百卅 獨り立

事情に従はんか、我心の赴く所に従はんか、或は道理を尋ねて其の示す所に従はんか、今の世に身を處するも亦た難事なり、お登和嬢は平生自分の心を主張する如き人物ならねど今は少し覺悟の異なるあり「兄さん、私が早くお嫁に参りませんと阿父様や阿母様はそれ程御心配遊しませうか」兄「御心配なさるとも、和女を東京へおよこしなすつたのも一つには東京で好い口を捜す方が速いだらう、何うか好い處を見附けて早く嫁入させて呉れると呉々も私にお頼みだつた、阿父様や阿母様は一日も速く和女の身が片附く様にと其事計り思つて被在る」お登和「ですけれども子、氣心の知れない様な人の處へお嫁に往つても其先が何うなるか解りませんから却て御心配を増す様なものですネ」兄「道理を言へば爾うに違ひ無けれども我邦の事情として娘を嫁に遣つて了はなければ親の役目が濟まないとなつて居る、人によつては嫁に遣られたために却て不幸を招く者もあらうけれども親の身になると娘がお嫁に行かなければ安心が出来ないのだ」お登和「それがネ、昔

の様に女は男の力で衣食しなければならんと云ふ事情ならお嫁に行かないと生涯人の厄介になるのですけれども今は随分女で獨立の道が無いでもありません、ナニも好んで獨立し度いと云ふ事はありませんけれども人の厄介になるまいと思へば何か工風が無い事もありません、私は未熟ですけども家庭料理の學校でも開いて生徒を集めたら随分一人立の出来ない事もあるまいかと存じます」兄「それは出来るさ、和女が家庭料理を教へるとなつたら必ず弟子も来るだらう、然しそれで何處までも押し通すと云ふ事は阿父様や阿母様が決して御承知なさるまい、お嫁に行けない程の不具であれば格別、和女なんぞは何處へでも往ける身だから態々爾んな事をしなくても好い處へお嫁に行けと必らず御兩親は被仰るよ」お登和「では困りました子、何うしたら宜う御座います」兄「何にしる大原君の方が早く片付かんでは何とも決斷する事が出来ん、大原君が愈よお代先生と結婚したのなら此方にも考へ様があるけれども大原君がいつまでも極まらずに居るのを、今更外へ嫁入口を捜す譯にもならん」お登和「爾うで御座いますとも」兄「兎に角大原君の方を早く極めさせ度いが今の口振では悪くすると大原君が天の命なりと諦らめて事情に服従するかも知れん、それも氣の毒だからな」お登和「何とかして大原さんをお助け申す工風はありますまいか」兄「別に名案も無い、老人達には道理と利害を説いて中止させる事が出来ても御當人のお代先生が動かんと云ふから子、それには一番困る、何とかお代先生を説き付けて自ら悟らしめる方法が無いかならん、小山君の妻君は最初からあの人達と懇意だから小山の妻君に頼んで先づお代先生の心を聞かせて見やうか、もしもお代先生に大原君の様な心があれば仔細無く治まるけれども」と中川は遂に小山家へ赴きて小山夫婦とお代嬢の問題を相談せし末、小山の妻君がお代先生の意中を探るべき役目と定まれり、